哲学とはなにか

小林　道憲

哲学とはなにか

小林道憲

目次

哲学のために
哲学の出発点
道化の野蛮性
専門化の野蛮性
無知に帰れ
輸入哲学からの脱却
哲学へのあゆみ
時代批判の試み
生命論的世界観の展開

哲学の出発点

よく知られていますように、プラトンやアリストテレスは、哲学は〈驚き〉から始まると考えています。例えば、プラトンは、『テアイテトス』（155A）の中で、

「なぜなら、実にその驚きの情こそ哲学者の情なのだからね。つまり、哲学の始まりはこれよりほかにはないのだ。」

と言っています。また、アリストテレスも、『形而上学』（982b12）の中で次のように言っています。

「けだし、驚きによって、人間は、今日でもそうであるが、あの最初の場合にも、あのように哲学し始めたのである。」

他方、これもよく知られていますが、デカルトは、哲学は〈懐疑〉から出発すると考えています。実際、デカルトは、『方法序説』（第四部）の中で、

「いささかでも疑わしいところがあると思われそうなものはすべて絶対的に虚偽なものとしてこれを斥けていき、かくて結局において疑うべからざるものが私の確信のうちには残らぬであろうか、これを見とどけねばならぬと私は考えた。」

と言っています。

しかし、驚きや懐疑から始まるということは、哲学に限らず、すべての学問に通じることです。それは、およそ知識を求めることがそこから始まる出発点です。現に、哲学（philosophia）という言葉は、もともと、広く知識を愛求することを意味し、今日の学問分類で言いますと、人文、社会、自然のあらゆる学問を含んでいました。学問認識は、事柄に対する驚異の感情や事柄に関する知識への懐疑から出発するのです。

なるほど、自然科学では、実験的方法にしても、観察的方法にしても、帰納的方法にしても、演繹的方法にしても、それぞれの分野に応じて、真理を探究する方法は定められていて、一定の方法論が確立しています。ですから、自然科学は、哲学ほど、方法論そのものを問題にはしません。しかし、だからといって、自然科学であっても、ただ単に与えられた一定のルールに従って探究して行けば、自動的に真理が見出されるというわけのものでもありません。自然科学でも、最初にどこに疑問を懐いたかということは、一つの結果

を得るための重要な出発点になります。そして、その疑問は、その最も奥深くでは、自然現象に対する深い驚異の感情に裏づけられています。自然科学の発見でも、従来の考え方への懐疑が大きければ大きいほど、また、事柄そのものへの驚異の感情が深ければ深いほど、その発見は一時代を画するような大きなパラダイム転換（枠組み）をもたらすものです。

としますと、知識を求めることは驚きや懐疑から出発するという昔からよく言われてきたことは、今日でも、哲学ばかりでなく、人文、社会、自然のすべての学問に通じるはずです。わたしたち人間の知的探究は、何事につけ、事柄に対する素朴な驚きや既成の知識への懐疑から出発して、それがいろいろな学問的認識を生み出していくのです。なかでも、哲学は、この出発点の驚きや懐疑に絶えず戻りながら、諸学問の知識を吟味し、それらを総合して、一つの世界観にまとめていこうとします。

ところで、今日のわが国の大学でも、学生たちは、少なくとも、大学で教育される学問にはほとんど白紙の状態で入学して来ます。そして、さしあたり、一般教育で諸科学の全般的な方向を広く浅く学び、その後、専門分野の研究に入っていきます。この大学での知的探究の方向は、知識を求めるという人間の営みに適（かな）ったものと言えるでしょう。知識を求めることの出発点で驚きや懐疑というものが重要な要（かなめ）になることを考えるなら、一般教育でこそ、この知識を求めることの出発点が自覚される必要があります。そして、そのあらゆる知識を求めることの出発点を伝えるのは、特に、哲学というものの役割です。その点では、一般教育でこそ哲学を活かす道はあり、哲学は不可欠だということになります。西洋でも、リベラル・アーツ（自由学芸）は哲学と深く連関していました。

さらに、今日の大学での学問体系は流動化しており、これまでの専門分化の弊害を克服することを目指して、総合化の方向に向かってもいます。人文、社会、自然という従来の学問区分の垣根を破って、さまざまの科学が、〈情報〉とか〈環境〉とか〈生命〉とか、種々の共通問題を通して学際的に接触してきていることは否定できません。このような学問の総合化の方向に哲学の果たすべき役割も大きいと思います。

よく知られていますように、もともと、哲学は、種々の学問が分化してきた母体でもありました。ですから、今でも、哲学はあらゆる学問に関係しています。これだけ諸科学が細分化し、それらのもたらす情報が膨大なものになったとはいっても、それでもなお、哲学は、諸科学に共通するものを通観して、それを一つの世界像にもたらす役割を失っては

いません。諸科学が総合化の方向に向かっている現在、その流れの中から一つの世界観を構築していくことは、哲学に課せられた重要な課題です。人文、社会、自然の諸科学の最後の基盤には、なお哲学が必要です。

もちろん、一口で諸科学の総合と言っても、言うことは容易ですが、実際に実行することは容易ではありません。しかし、それでもなお、哲学には、昔から、諸学問を統一して共通の世界観を構築するという役割があったのです。この本来哲学に課された役割を忘れることなく、例えば、今日諸科学の共通項になりつつある〈情報〉〈環境〉〈生命〉などについて深く考察を重ねていけば、哲学は、その本来果たすべき役割を、一部ではあっても果たすことができるでしょう。

自己と世界、そして両者の関係を理解しようとする人間の知的営みは、人間が無自覚の世界に埋没したあり方から離脱し、世界を自己の外なるものとして自覚し、自己自身を世界の外なるものとして自覚したときから始まりました。この世界の破れとその自覚は、何よりもまず、世界と自己の内奥への驚きの感情として現われます。それが、自己と世界を理解しようとする人間の知的営みを引き起こす原動力となります。あらゆる学問は、この同じ樹の幹から分岐していきます。哲学が諸学問の統一の役割を背負っているのも、諸学問がそこから生成してくる根源的な驚きや問いに、哲学が絶えず身を置いているからです。

しかし、果たして、今日のわが国で行なわれている哲学は、このような哲学の本来の役割を果たしていると言えるでしょうか。これからさまざまの学問を追究していこうとする青年たちに、その出発点での驚異の感情を自覚させ、さらに、総合化の方向に向かっている諸科学の流れにそって、共通な世界観を見出す努力をしていると言えるでしょうか。このことができるようになるためには、何よりも、人間が人間として地上に立ったときの原初的な驚異の感情に絶えず身を置くとともに、そのことによって、諸学問の統一の方向を身をもって探究すること以外にありません。

道化の野蛮性

ところが、今日のわが国の大学の現状を見ますと、なによりもまず、大学の大衆化という現象が見られます。大学進学率の増大とともに、一般に、目的や動機が曖昧なままで、ただ皆が行くから行くというだけの平均人特有の行動様式で大学に入ってくる学生が急増しました。彼らは、学問追究でも全く受動的態度で臨み、問題意識をもたず、自ら追究し

ていく意欲に欠けています。彼らにとっての関心は、多くの場合、短いモラトリアムの期間、いかに人生を謳歌して生きていくかということに向けられています。真剣な関心と言えば、せいぜい成績の可否と就職程度のことです。卒業や就職に有利か不利かというだけで動き、それ以上のものを自分自身で追究しようとは必ずしもしません。

このように、生の謳歌と人生への実利主義的な態度が支配しているところでは、人間と自然の本質に深く思いを馳せ、世界の根源について深く思索しようとする哲学など必要としないように思われます。

もっとも、単なる生の謳歌と人生への実利主義的な態度だけでは、人生に伴う不安は解消しません。何とはなしの不安の解消を保証し、安上がりな救いを約束する新宗教や新新宗教が若者の心を時にとらえたりするのは、そのためでしょう。しかし、これは、ものごとを深く思考するのではなく、手っとり早く思考停止してしまうことにほかなりません。ここでも、持続ある思考を要求する哲学は必要ないように思われます。〈ものごとを深く考える〉（哲学する）ということは、どこまでも、事柄に対する最初の驚きの感情を持続し、すでにある知識に対して懐疑を重ねながら、深く思考し続けようとすることでなければなりません。

このような時代に、いくらか哲学らしきものが流行するとすれば、それは、この大衆化した社会に適合した間に合わせの思想だけです。ここでは、単なる世代感覚の代弁に過ぎない思想や、その時々の単なる風潮や流行の代弁にすぎない思想などがもてはやされます。しかし、このような傾向は、プラトンが『ゴルギアス』（463A以下）の中で繰り返し言っていますように、単なる〈迎合〉にすぎません。ただ、大衆の言って欲しそうなことを、気の効いた言葉で言うだけにすぎません。現に、プラトンは、弁論術について次のように言っています。

「いずれも、何が最善かということにはすこしも意を用いず、ただ、そのときそのときにできるだけ快い思いをさせることによって、無知な連中の心をつかみ、彼らをあざむいて、いかにも大したものであるかのごとく思わせているのです。」（465B）

このような傾向がはびこるとき、本来展開されねばならない哲学の営みは、大衆化の大波をこうむって、底無しに引き下げられ低落していきます。勢い、このようなところで演じられる思想は、その時々に流行してはすぐさま廃れていくファッションにすぎなくなります。そこで思想らしきものを語る者は、流行のファッションを身につけて歩いて見せる

単なる道化と化してしまいます。哲学者もタレント化してしまうのです。しかし、このような道化の野蛮性が横行するのが、大衆化時代の行き着く先なのです。ここでは、コマーシャリズムの波に乗せられて、おびただしい数の思想がたやすく生産されると同時にたやすく消費され、使い捨てられていきます。

専門化の野蛮性

今日の学問の現状のもう一つの特徴は、従来から言われていることですが、学問の細分化という現象です。確かに、最近では、この細分化の弊害を克服するために、諸科学の総合化の流れが起きています。しかし、それでも、学問の細分化による全体像の喪失という弊害は、今日でもなお根強く残存しています。本来総合の学であり、諸学問の統一を目指さねばならなかった哲学も、また、その例外ではありません。今日、わが国で行なわれている哲学研究は、多くの場合、過去の偉大な哲学者の文献の注釈や解釈、再構成や解説に終始し、それを講じていさえすれば、少なくとも哲学していると思われています。

しかし、このように哲学が専門化し、文献学化して、哲学者が単なる専門家になってしまうとき、哲学の頽落（たいらく）は始まります。過去の哲学者の文献へのこだわりは、それが行き過ぎると、やがて、事柄そのものの追究よりも、文献そのものの追究が重んじられる結果を招いてしまいます。そして、哲学が本来追究しなければならなかった事柄そのものの追究は忘れられていきます。事柄そのものについて自分自身がどのように考えるかということよりも、過去の哲学者がどう考えたかということだけが重んじられるようになってしまうのです。過去の偉大な哲学者自身は、文献研究よりも、何よりも事柄そのものを全人格をかけて追究しようとしたのにです。

ここでは、当の研究者がどう考えるかということは免除され、研究者は、ただ、過去の偉大な哲学者の思想を繰り返すか、再現するか、せいぜい適当に脚色して演奏していればよいことになります。ニーチェが『ツァラトゥストラ』（第一部一二）で言っていることですが、これは、他人の創造物なら何でも上手に演ずる俳優の仕事にすぎません。このような俳優的な仕事の中でも、一種の思考停止が起きます。哲学するということは、とりもなおさず、事柄そのものに関してみずから深く考えることにほかなりませんが、この持続ある思考が、専門的な文献研究に埋没している間に、知らず知らずのうちに放棄されてしまうのです。ニーチェは、『ツァラトゥストラ』（第二部一六）の中で、このような学者の仕

事をクルミ割りにたとえ、労多くして、それでいて獲得できる中身の少ない作業とみ、さらに、あらゆる複雑な縫い方を心得てはいるが、せいぜい靴下ぐらいしか編み出せないような仕事だとみています。彼らは、他人の思想という穀物を細かく砕く術を知ってはいるが、しかし、自分でそれを生み出そうとはしないと、ニーチェは言っているのです。

その結果、度を過ぎた文献への埋没は、過去の哲学者の頭でしか考えられない研究者を大量に生産することになり、本来の創造的哲学の生まれくる場を奪ってしまいます。哲学が単なる文献学に堕し、単なる哲学史研究に終始してしまうとき、哲学の創造性は失われます。哲学が細かな文献解釈に終始し、もはや大きな世界観や人間観を提出しえなくなるからです。実際、第二次大戦後のわが国では、哲学が大きな世界観や人間観の提出を怠っているうちに、逆に、経験科学の方法を駆使した社会学や心理学や人類学から、新しい世界観や人間観が提出されてきた傾向は否定できません。社会学や心理学や人類学が、哲学の代理を果たしたのです。これは、哲学の怠慢だったと言わねばなりません。オルテガは、『大衆の反逆』（第一部12）の中で、現代の科学者が自己の専門分野のことについてはよく知っているが、他のことについては知らないことをむしろ美徳とすることによって、専門化の野蛮性に陥ってしまう危険性を指摘しています。ところが、本来は総合の学であったはずの哲学までもが、この野蛮性に埋没してしまったのです。

無知に帰れ

大衆化と専門化という現代社会の大波から、哲学も逃れられてはいません。一方では、大衆化の波に呑まれ、哲学がファッション化するとともに、他方では、専門分化の弊害に陥り、哲学が単なる文献学に堕して、世界の全体像が見失われてきています。今日の哲学に最も必要なことは、この道化の野蛮性と専門化の野蛮性という二つの堕落方向を克服することです。そして、哲学がそこから始まり、過去の偉大な哲学者もそこから出発した事柄そのものへの驚きの感情へと帰り、そこからもう一度、自分の思索を始めるのでなければなりません。つまり、真に哲学するのでなければなりません。デカルトにしても、ニーチェにしても、当時の学校哲学や文献学への懐疑から、自己の哲学を始めたのです。

今日の哲学が陥っている二つの頽落傾向を克服するためには、何よりも哲学研究者自身が哲学の出発点に帰って、みずから哲学する必要があります。みずから哲学する哲学者が少なくなったことこそ、哲学の存在理由を危うくするものではないでしょうか。哲学する

ことは、時代や社会から全く超絶したことではなく、時代や社会の中で哲学者自身が生きているということと深く結びついています。もちろん、単なる時代迎合になってしまってはいけませんが、時代や社会との緊張関係を保ちながら、真に哲学することはなされねばならないことだと思います。

歴史があまりにも長くなりすぎ、過去の人々の考えをあまりにも多く知りすぎたことは、かえって、哲学がそこから出発した人間の本来的無知を忘却させてしまいます。ニーチェが、『生に対する歴史の利害について』（一～三）の中で、骨董学的な歴史探究がかえって生命ある創造性を失わせてしまうことを指摘し、逆に、過去の〈忘却〉を奨励しさえしたのは、このことを自覚してのことだったのでしょう。

人間はなお事柄の本質についてはよく知っていないということ、つまり、本来的無知の状態に帰って、そこから再び知恵を求めていくのでなければなりません。ソクラテスは、とりもなおさず、このことを指示していました。よく言われますように、哲学は哲学すること以外にありえません。わたしたちは、過去の偉大な哲学者の思想をも踏み台にして、事柄への新鮮な驚きの感情に立ち帰り、自分で考え懐疑し、世界と人間の根源的真理について深く思索するのでなければなりません。

輸入哲学からの脱却

しかし、もう一つ、わが国独自の問題が残されています。わが国では、明治以来、西洋化の流れとともに、哲学でも、西洋哲学が主流を占めたために、哲学は、一般に、西洋哲学の翻訳や解説、解釈に終始してきた面は見逃すことはできません。もちろん、その間、西洋哲学の論理や方法を深く会得しながら、独自の哲学を打ち立てたすぐれた哲学者が出てこなかったわけではありません。しかし、それでもなお、一般に、わが国の大学で講じられてきた哲学が西洋哲学の輸入に堕していた傾向は否定できません。

わが国の大学で哲学を講じてきた研究者は、大概、西洋の偉大な哲学者を一人か二人専攻し、その思想の解説や普及、解釈や再構成をしていれば、ひとかどの哲学者でもあるかのように、その地位を保つことができました。わたしどもが、一応哲学している形をとれているのは、自分が専門とする西洋の特定の哲学者のことを知り、その思想を解説しているからです。ちょうど太陽の光でようやく輝く月のように、わたしどもは、自分の専攻する西洋の偉大な哲学者に仮託し、ようやく哲学しているかのような恰好をとることがで

きたのです。

このように、単なる輸入哲学にすぎなかったという点こそ、いくつかの例外を除いて、一般に明治以来の病弊でもありました。ここでも、西洋の哲学者の思想の解説や解釈に急なあまり、哲学本来の出発点である事柄そのものへの驚きや知識に対する懐疑は忘れられ、自分で哲学するということはなおざりにされる傾向にありました。

そればかりか、わが国の知的大衆は、次々と輸入されてくる欧米の哲学者のその時々の思想を頭に戴いていれば、安心もしました。そして、このような傾向が行き過ぎると、わが国の思想界は、まるで最新のパリモードを追いかけるファッション界のように、次から次へと登場してくる欧米の思想の新しい流行を追いかけることに血眼になるというような浮ついた傾向さえ示したのです。二十世紀末のわが国でのポストモダニズムの風潮も、つまるところ、今まで何度も繰り返されてきた西洋の流行思想の輸入にすぎなかったようにも思われます。しかも、それは単なる流行にすぎませんから、意外と早めに飽きられもし、廃れてもいきます。それなのに、また、飽きもせず、次の西洋の新しい流行思想を輸入してきたのが、わが国の明治以来の思想界の風潮ではなかったでしょうか。

夏目漱石は、すでに、明治の段階で、この日本人の皮相さを見抜いていました。彼は、明治四四年に行なった講演「現代日本の開化」の中で、まず、日本人が西洋文化を追うのに急なあまり、自己本位の能力を失ってしまったことを指摘しています。そして、次から次へと押し寄せてくる西洋文化の波は、まるで、食膳に向かって皿の数を味わい尽くすどころか、どんな御馳走が出たかはっきりと目に映じない前に、もう膳を引いて新しいのを並べられるようなものだと述べ、このような風潮の影響を受ける国民は、どこかに空虚と不満と不安を懐かなければならないと言っています。このように、次々と西洋からやってくる新曲の楽譜を演奏し、これを鑑賞しているだけでよいところでは、もちろん、自分で作曲する必要はありませんから、いくつかの例外を除いて、当然、創造的なものは出てこなかったと言わねばなりません。

なるほど、わが国では、古代の昔から、いつも、世界観や人間観など思想のパラダイムは、儒教にしても、仏教にしても、中国や朝鮮など海外からやって来ました。しかし、かつての日本人は、それらを絶えずわがものとし、自家薬籠中のものにして、そこからまた独創的な思想を生み出してもきたのです。この点では、ヨーロッパも同じことであり、古代のギリシアやローマの文化、さらにキリスト教の精神やイスラムの影響を受け入れて、

それを自分のものにするとともに、そこから独創的な思想を生み出してきました。

ところが、わが国の場合、明治以後の西洋化が始まってからというもの、文化は常に借物文化で済まされ、外からやってくる思想を自分のものにして独自のものを生み出すという動きが、時代が降(くだ)れば降るほど少なくなっていったように思われます。

わが国の場合、このような輸入哲学的あり方からも脱却しなければなりません。そして、西洋由来の論理や思考法を踏まえながらも、なお、独自にものを創造していかねばなりません。それは、また、哲学の出発点である事柄への驚きとあらゆる知識への懐疑に立ち帰り、主体的に、世界と人間の根源的真理について思索することによってのみできることなのです。

時代批判の試み

晩秋から初冬にかけての日本海側は、大陸から北西の強い季節風が吹き始め、やがて霰(あられ)まじりの時雨ともなり、薄ら寒さが一層肌に沁み込んできます。そして、水蒸気をたくさん含んだ季節風は、列島の褶曲山脈にぶつかって大量の積雪をもたらし、日本海側は冬籠もりの季節に入ります。たとえ雪の少ない年でも、冬告げ雷が鳴ってから早春の陽差しが戻ってくるまでの日本海側は、鉛色の曇天が延々と続きます。列島の日本海側は、どことなく陰鬱さをただよわせた裏寂しい気候風土なのです。

しかし、それだけに一層、日本海側に育った人々にとって、春の訪れはひとしおうれしい命の復活の季節です。早春の陽差しに輝く残雪の切れ間に顔を出した緑色の草々の中に、オオイヌノフグリの真っ青な小さな花々を発見したときの感動は、太平洋側の人々には、その実感を十分伝えることができないほどです。

そのような憂愁の気をたたえながらも命の芽吹きへの感受性を育ててくれる風土に、わたしは生まれ育ち、人生のほとんどを過ごしてきました。わたしの思想の中に、なにがなしの憂鬱さとともに、命あるものへの讃嘆の情感が潜んでいるとすれば、その背景には、このような日本海側の気候風土が横たわっているかもしれません。

しかし、そういう風土の土地にも、ここ半世紀ほどの間、時代を追うにしたがって、現代の情報洪水は否応なく押し寄せ、古きよき風習の名残りをまだなお保っていた共同体は瞬く間に崩壊していきました。

確かに、現代は、消費物資としてのおびただしい数の出版物をはじめ、大量の断片化した情報が、どこからともなく吐き出され、どこへともなく消え去っていく空しい時代です。このような情報の大量生産と大量消費の時代には、ただ時代受けするにすぎない軽佻浮薄な思想が、次々と生み出されては、消費されていくだけです。現代において流行するものは、なんら不易なものの痕跡もとどめていません。

現代の情報洪水の中では、学問は孤独です。哲学思想の分野でも、今日では、それ自身が専門分化し、文献学化してしまい、まるで独り言をいっているかのように、その業績はほとんど時代的な意味をもっていません。わたしどもがいささか学問を志し、研究者への

道を歩み始めたころから、すでにそうでした。現に、わたしどもが師事した哲学教師たちも、なるほど、専攻する西洋の哲学者の文献には事細かく通じている立派な研究者ではありましたが、みずからの哲学を語る人はひとりもいませんでした。そうこうしているうちに、哲学研究は、まるで博物館に陳列した方がよいような骨董学と化してしまったのです。

他方、その後、二十世紀も末くらいになってからのことだと思いますが、今度は逆に、哲学思想分野でも、ただ時代の波に乗って気の効いたことを言うだけにすぎないタレントのような〈思想家〉が登場してきたことも確かです。

一般に、現代では、知識人の世界が、自分の専門分野にのみ閉じこもって他を省みない単なる専門家か、大衆化の流れに迎合して、大衆の言って欲しそうなことを言うにすぎない単なる道化か、いずれかになってしまう傾向が見えます。

このような時代に、果たしてものごとについて深く思いを巡らし、それを表現することに、どれほどの意味があるのでしょうか。現代は、たとえ深い哲学的思索や深遠な思想が提示されても、すぐにどこかへ追いやられていってしまう空虚な時代です。

わたしは、そのような時代にあって、真にものごとを深く考えること、つまり哲学するということは可能なのかという問題にぶつかり、差し当たり、〈現代とはどのような時代なのか〉という問題から、自分自身の哲学的思索を始めねばなりませんでした。

わたしが現代文明論に関するいくつかの著作を発表していった背景には、以上のような時代認識があったのです。現代人が直面している精神状況について冷厳な批判的考察を加えた一連の著作は、一種の時代批判の試みであったと言えるでしょう。これらの著作で意図したことは、十九、二十、二十一世紀と、世紀を重ねるごとに拡大してきた精神の散乱のさまざまな様相をとらえ、現代文明の全体像を明らかにすることでした。

しかし、これらの厳しい時代批判の中でも、わたしは、現代文明がそこから生い立ち、そこへと帰り行くところを見つめながら、なお確固とした地盤を見出し、なお変わらないものは何かを見定めようともしてきました。この現代という精神的終末の時代を先取的に終わりまで生き抜いて、これを思想的に包み越える道を、わたしは求めてもいたのです。

生命論的世界観の展開

その後、現代の対極にある日本や世界の原始古代に帰って、古代人の世界観や人生観、宇宙観や自然観、霊魂観などについて考察してみたのは、そのような現代の諸問題を思想

的に包み越える道を見出すためでもありました。そして、生命感あふれる古代の人々のものの見方、考え方を探っていく過程で、わたしが見出した思想は、〈大地と生命の永遠〉という思想でした。「あらゆるものは大地から生まれ大地に帰る」という生命の再生と循環、永遠回帰の信仰こそ、宇宙の偉大な生命力を信じていた古代人の世界観であり、現代人が忘れてきた思想でした。

こうして、〈大地と生命の永遠〉という思想に至り着いたわたしは、次に、この思想に基づいた生命論的世界観を展開するために、一転して、現代の宇宙論や物理学、生物学や生態学などを素材とした新しい自然観の追究に向かいました。それは、現代の自然科学の成果をも取り入れながら、〈生きた自然〉を明らかにしようとするものでした。そして、この自然哲学の展開の中で得られた思想は、「この宇宙は常なる生成の世界であり、純粋の活動力であり、無限の創造力であり、その生命（いのち）は永遠である」という思想でした。

この思想を基軸にして、その後、わたしは、生命の本質から宇宙の真理にまで及ぶ独自の世界観を、自然ばかりでなく、社会、歴史、倫理、芸術、宗教、文明、存在、認識一般に及ぼし、自分なりの哲学を展開してきたのです。それは、一言で言えば、生命論的世界観の構築ということになるでしょう。

実際、実践哲学を展開するときも、この生命論的世界観から、人間社会を常に変動する〈生きた社会〉とみて、そこでの行為の意味や価値を考えてみました。当然、行為の意味や価値も状況に応じて動いていくことになりますから、わたしの倫理学は、行為の意味や価値を生成変化の中でとらえる〈動く倫理学〉の展開となりました。

しかし、わたしの哲学の根幹にあるものは、宗教哲学です。ここでも、わたしは、仏教やキリスト教で語られた宗教思想を生命論的世界観から解釈しました。仏教で求められた解脱の境地を根源的生命への帰一と理解し、浄土系仏教やキリスト教の救いの境地を根源的生命への絶対信頼として理解したのは、そのことによります。宗教は宇宙生命への畏怖から出発し、宇宙生命への帰一によって完成します。宗教的世界の中に生命論的世界観を探ろうとしたのが、わたしの宗教論です。

わたしがこのような宗教論を展開し、それを最後の基盤とした背景にも、まだ宗教的雰囲気をただよわせていた幼い日々の北陸の風土が影響しているかもしれません。わたしの生まれ育ったところは、厳しい気候風土の中、道元が日本曹洞宗を開いた土地でもあり、蓮如が浄土真宗本願寺派を広めた土地柄でもあります。わたしの宗教思想の源には、確か

に道元と蓮如、そしてその源泉である親鸞の思想があります。さらに、わたしは、十五歳のとき父の死にあい、学問を志してからも自分の無力に悩むことが多く、若いうちからいろいろ彷徨を重ねたこと、四十歳のとき、第二子を喪ったことなども、この宗教論には深くにじみ出ていると思います。

どんなに長い人生でも、一言で要約することができます。わたしの哲学への歩み、思想の来歴を一言で要約するとすれば、「現代文明の批判的考察を通して、それを包み越える方向で、生命論的世界観を構築してきた」ということに尽きるでしょう。

現代文明の考察が非真理についての考察であり、生命論的世界観の展開が真理についての考察だったとすれば、今後は、この非真理と真理の二つの方向をなんらかの形で結合することが、わたしにとっての最後の課題となるでしょう。